

生徒生活体験発表 宮城県大会

後藤愛美さん 2位入賞

10月5日(土)岩沼市民会館で、第61回となる、生徒生活体験発表 宮城県大会が行われ、宮城県内にある定時制通信制の高校から、代表14名が出場しました。七ヶ宿校からは3年の後藤愛美さんが出場し、『無と苦の先』と題して、自らの体験や思いを堂々と発表しました。

後藤さんの発表は、多くの聴衆に深い感銘を与え、読売新聞社賞(第2位相当)を受賞しました。



後藤愛美さん(3年)



表彰を受ける後藤さん

次に、後藤さんの発表の全文を掲載します。なお、全文掲載に当たっては、本人及び保護者の了承をいただいております。

「無」と「苦」の先

三年 後藤 愛美

私が生まれると、母は自分の両親に私を預けた。祖父母は私が寂しがらないように、学校の色々な行事にも、若いお母さんに負けないくらい来てくれた。私が元気がない時に、一番心配していることも知っている。自分たちが疲れていても、私のことを考えてくれる。両親がいなくてもすごく幸せで、病気にも負けずこんなに大きくなった。

ところが私は、中学校の途中から学校に行かなくなった。友達と上手く付き合えない。勉強にもついていけない。何もうまくいかない。私は学校に行く意味がわからなくなった。不登校の生徒が集まる「けやき教室」にも行った。中学校の記憶は半分消した。中学時代をひと言で表すと「無」。何もない。

高校に行く気もなかったが、あるとき、けやき教室の友達に、「愛美ちゃんも高校に行ってみれば、何か見つかるかもしれないじゃん。」と言われた。ふと思った。

「もしかして、こんな私にも可能性があるのかな。ずっと心配をかけてきた祖父母に、私が変わった姿を見せることができるのかな。」

私は七ヶ宿校の受験を決めた。

入学してみると、七ヶ宿校は、アットホームな学校だった。先生とだって友達みたいに仲良くなれる。最初は、朝早く起きて学校に行くことすら大変だった。でも、毎日頑張って学校に行っていたら、だんだん楽しくなってきた。部活も勉強もやる気になった。部

活は没頭するくらい楽しかった。

私達の学年は男子七人、女子は私ひとりの八人クラス。誰かが面白いことを言うと、みんなに聞こえて、みんなで笑い合える。

中学では、友達を作ろうとすら思わなかった私にも、友達ができた。お互い気を使うことはあっても素直に話せる、そんな仲になりたいと思った。

しかし、どんどん仲良くなるにつれて揉めるようになった。なんて面倒くさい人、と思って頭に来た。でも、私だって面倒な人間の一人。八人だけのクラスも、最初は楽しかったが、一人でも、やる気がなかったり、イライラしていたりすると、クラス全体に影響する。考えていることも 体力も違う。みんなの気持ちが分からなくなったり、体育も男子だけの方が楽しいんじゃないかと思った。だんだん、私は、クラスに居づらいつと感じることが増えてきた。

そんな時、母から突然連絡があった。母は私に「お前なんて産まなきゃよかった」と言った。いきなりすぎて何も受け止められなかった。——やっぱり生まれてきたこと自体、間違っていたんだ。

自分の居場所がわからなくなった。すべてにやる気を失せた私は、生まれて初めてリストカットに走った。痛みなんて感じない。なぜか切っている時は全部忘れられた。

何日か経って、祖母に傷痕を見られた。いろいろ言われ、何も分からないくせにと思っ、言っではいけないことを言っしてしまった。「なんでこんなの育てたの。捨てちゃえばよかったのに」

そう言っ時、今まで一度も手をあげなかつた祖母は、私の頬を強く叩いた。私は驚いた。ショックだった。誰よりも傷ついたのは、私ではなく祖母だったのに。

自分を変えるために私は七校に来たのだった。死ぬためじゃない。逃げるためじゃない。

深く考えなくていいことを深く考え、深

く考えるべきことを流す。弱いと思われたくないし、負けたくないから、強いふりをしたり、問題を人のせいにしたたりする。自分にはそんなずるいところがあると思う。

一つ一つ変えようと思っ。でも、そう簡単に自分の性格は直らない。友達と感情のすれ違いがあると、自分のいいように考え、逃げ、リストカットに手を出してしまう。本気でいなくなろうと思っこともあつた。

こんなことを繰り返す私を見て、ある日友達が言っ。

「生きようよ。何もうまくいかななくても、今日の今まで生きてきたんだから。そのくらいあなたは強いんだから。生きていこう」

自傷行為に逃げそうなとき、私はこの言葉を思い返す。

振り返ってみると、私の高校生活は苦しいの「苦」だ。でも、高校に来なければよかつたとは思わない。苦しいけれど、何も考えなかつた中学時代よりずっといい。人との関わりの中で、大切なことにたくさん気づいたし、人の気持ちが前よりはわかるようになった。

そして、仲間ができた。だめなことはだめと教えてくれる友達。笑わせてくれるクラスのみんな。辛い時そばにいてくれる後輩。話を聞いてくれる先生。それから、決して好きとはいえないけれど、母がいたから私はここにいるんだ。そう心から思える。

卒業まであと半年。「無」と「苦」の次には何が来るのだろうか。すごく怖いし、不安でたまらないけれど、私は頑張れる気がしている。高校生活を通して、少し強くなったから。

何を信じたらいいか、迷うこともあるけれど、私は無理矢理でも、がむしゃらに生きていく。いつになるかは分からないけれど、祖父母に胸を張って「ありがとう」って言いたい。